

海外視察レポート

ぶぎん経営者クラブ海外視察

ロシア極東地域経済視察報告

ぶぎん地域経済研究所取締役調査事業部長 松本 博之



ぶぎん地域経済研究所はぶぎん経営者クラブ会員企業を対象にしたロシア極東地域経済視察を7月2日（火）出発、同8日（土）帰国の4泊5日の日程で実施した。今回は成田空港から3時間足らずのフライト時間で行ける“日本に最も近いヨーロッパ”として観光面でも脚光を浴び始めたロシア極東地域のハバロフスク市とウラジオストク市を訪問し、経済や産業の特徴や社会インフラの状況などの視察を中心に視察ツアーを実施した。

ロシア極東地域とハバロフスク市とウラジオストク市について

今回視察を実施した地域は、一般に言われている“ロシア極東”と言われる地域で、その中でも政治、

経済、産業や軍事といった面で中核都市となっているのがハバロフスク市とウラジオストク市である。両市と日本との位置関係は左下の行程図を参照いただくとして、視察地の概要について簡単に説明をしたい。

両市ともにロシア共和国の「極東連邦管区（Far Eastern Federal District）」（面積 617 万 km²、人口 616 万人）に属している。ハバロフスク市は、同管区の構成体の一つである「ハバロフスク地方」（面積 79 万 km²、人口 133 万人）の首府（行政府所在地）で人口 62 万人である。一方、ウラジオストク市は「沿海地方」（面積 17 万 km²、人口 191 万人）の首府（行政府所在地）である。ハバロフスク地方と沿海地方の合計で人口が 324 万人となり、極東連邦管区の 9 つの構成体の実に 52.5% と、半数以上の人々がハバロフスク地方と沿海地方に居住している。ちなみにウラジオストク市は、極東連邦管区の首府でもある。



視察ツアーの行程図（概要）



視察地の概要

ハバロフスク市

アムール川とウスリー川の合流地点に位置するハバロフスク市は歴史的にロシア極東地域の政治・経済・文化の中心であり、河川に始まり空路、陸路の結節点として交通の要衝である。ロシア極東地域のハバロフスク地方の首府となっている。

多くの緑に囲まれ、歴史的建造物が多く残り整然とした街並みは、まさにヨーロッパである。

■レーニン広場

ハバロフスクの中心にあるレーニン広場。モスクワの赤の広場に次ぐ広さである

■中央市場

ハバロフスクで最も大きい庶民的なショッピングエリア。生鮮食品から衣料品など数多くの店が並んでいる。

■ウスペンスキー教会

市内に建つ青と白が印象的な美しい教会。現在の建物はソ連崩壊後に再建されたもの。ハバロフスクのランドマークの一つとなっている。



ハバロフスク市中央市場



ハバロフスク市のランドマーク
ウスペンスキー教会



ハバロフスク市レーニン広場



ハバロフスク市レーニン像



ハバロフスク市アムール川展望台

■ハバロフスク地方の概要

地 理	人口：132万 8,300人（2018年1月） （ハバロフスク市：61万 8,200人） 面積：78万 7,600 km ² （日本の約2倍）
政 治	東部軍管区司令部の所在地
経 済	平均月収：46,855ルーブル（約78,000円） 失業率：3.8% 貿易総額（2018年）：31億 830万ドル 内対日貿易額：2億 2,930万ドル （輸出）：2億 1,150万ドル （木材、石炭、石油） （輸入）：1,770万ドル （プラスチック製品、自動車部品）
主要日本企業	双日、コマツ CIS、スミテック、 JGC エヴァグリーン、 サミットモーターズ
在 留 邦 人 数	ハバロフスク地方：52人

（資料：在ハバロフスク日本総領事館配布資料より当研究所にて作成）

ウラジオストク市

ウラジオストク市はロシア極東地域における日本海への窓口である。坂が多く、帝政ロシア時代からの美しい街並みから「東洋のサンフランシスコ」と呼ばれている。全長 9,000km 以上となるシベリア鉄道の東の起点でもある。ソ連時代には太平洋艦隊の基地があったため外国人の立ち入りが制限されていたが、1992 年に立ち入りが認められた。「一番身近なヨーロッパ」として観光産業にも力を入れている。



ウラジオストク市内



ウラジオストク港

ウラジオストク市内



アルセーニエフ博物館



シベリア鉄道 3 重連機関車

■アルセーニエフ博物館

街の中心にある赤レンガ造りの郷土資料館。沿海地方の生物、地理や歴史まで様々な分野の展示がされている。

■鷲の巣展望台

ウラジオストク市中心部の最高地点海拔 200 m の丘、「鷲の巣」の展望台。展望台からの景色は日中も夜も素晴らしいものがある。

■革命戦士広場

金角湾とメインストリート「スヴェトランスカヤ通り」の間にある帝政ロシア時代の建造物に囲まれた中心の広場である。「革命戦士」の像はウラジオストク市のシンボルとなっている。

■シベリア鉄道

起点のウラジオストクからハバロフスクを經由してモスクワまで走る世界最大の大陸横断鉄道である。全長が 9,259km の全行程を 7 日間で走る。全線開通は日露戦争当時の 1904 年となっている。



■視察先と内容

	日付	視察先等	主な内容
ハバロフスク市	7月2日	双日ハバロフスク駐在員事務所	同事務所松井所長を招いての卓話と夕食
	7月3日	在ハバロフスク日本総領事館	表敬訪問及びブリーフィング
		アヴァンギャルド工業団地	JGCエヴァーグリーン野菜温室工場視察
		ハバロフスク市内	中央市場、レーニン広場、大聖堂アムール川展望台、ウスペンスキー教会
7月3日～7月4日ハバロフスク駅発～ウラジオストク駅着シベリア鉄道の夜行列車（約12時間）にて移動			
ウラジオストク市	7月4日	ロシア極東発展省	ブリーフィングと意見交換
		FAR EASTERN ENERGY 社	川崎重工業製ガスタービン見学
		沿海地方アルセーニエフ記念総合博物館	沿海地方とウラジオストク市の歴史
		極東連邦大学	キャンパス内見学
	7月5日	SEJO FAR EAST 社	大型倉庫及び市内店舗
		ロシア極東発展省	市内マンション建設現場等で説明
		ウラジオストク市内	鷲ノ巣展望台、C56潜水艦博物館、ショッピングセンター等

(資料：ぶぎん地域経済研究所)

視察報告 (ハバロフスク市)

■在ハバロフスク日本総領事館

視察の始めとして、在ハバロフスク日本総領事館に表敬訪問するとともに、福島正則総領事と諸富学副領事よりロシア及びハバロフスク地方の政治、経済、産業と面積が日本の45倍、190以上の多民族国家であるロシア社会の多様性といった各分野について、詳細かつ率直に示唆に富んだブリーフィングをしていただいた。本視察ツアーの参加者全員がロシアが初めてであることから、前夜のディナータイムでの松井双日駐在員事務所長からの卓話の内容を含めて、各視察前にロシア極東地域の基本的な情報共有が図ることができた。

福島総領事のお話の中で、日本のようにゴミを分別収集し、リサ



ハバロフスク福島総領事



ハバロフスク日本総領事館でのブリーフィング

イクルをするという習慣がないロシアにおいては、産業廃棄物処理と廃プラスチック製品のリサイクルは喫緊の課題で、是非、日本や日本企業のノウハウを提供してもらいたい分野で、大きなビジネスチャンスがあるとの話が参加者の注目するところとなった。また夏と冬の温度差が60℃を超える当地においては、どうしてもアスファルト舗装の道路が傷みやすく、道路が陥没するところも多く、こちらにおいての日本の技術に期待がかかるともお話をいただいた。医療分野においては、特に予防診断に係る分野において、日本からの進出も期待されている。以上のように3つの事例は象徴的な事例であるが、数多くの分野で日本企業の進出が期待されている。

■ JGCエヴァーグリーン野菜温室工場視察

当社はエンジニアリング企業として有名な株式会社日揮が80%以上の資本金を出し、現地企業等との合弁会社として2015年2月に設立された。現在、従業員数は120人で5haの温室の中で、キュウリ、



JGC 新井一則社長

トマト、なす、パプリカを中心に1,300トンの野菜を収穫し、デパートや市内に5店舗ある直営店を中心に高級食材として出荷している。市内の一般的な販売店に比べて3~4割価格が高いながら、品質への信頼性と味の素晴らしさによって、いつも行列である。中産階級以上の嗜好に見事にマッチした商品として、人

気が高まっている。購入者は同じトマトやキュウリという認識ではなく、別の全く違う商品であるとして、商品価格に関係なく人気となっている。

これまでウラジオストク市内では、特に冬季では、中国から輸入され、2週間以上も陸路で運ばれてきた“ボロボロ”のトマトしか食べることが出来なかった。そうして中で、新たに温室栽培で作られた同社の商品は、“異次元のもの”として認識され、多くの中産階級を中心に販売を伸ばしている。2021年5月を目途に新たに5haの温室を作る予定で、いちごなど新商品にも挑戦する計画である。



JGCの温室と生產品

視察報告（ウラジオストク市）

■ロシア極東発展省

ここでは、沿海地方とウラジオストク市の経済と産業の実状を説明していただくと共に日本企業への期待についてお話をいただき、その後に活発な意見交換や質疑応答がなされた。

説明役には、アザマツト・ババエグ事業部長と同省の下部組織として直接、日本企業等の窓口業務を担っている極東地域日本投資促進会社のハチャイ・アレクセイ代表にご対応いただいた。こちらでも前日の在ハバロフスク総領事館とのブリーフィングにおいて話題となった廃プラスチックのリサイクルの問題と日本企業への期待が話題となった。

また、マンションやオフィス開発が進むウラジオストク市内においては、特に優良なビジネスセンターとしてのオフィスビルの需要が追いつかない状況にあり、またホテルも満杯になることも多く、日本の不動産や建設業者による市場参入への期待が話された。



ウラジオストク市
ブリーフィング



極東地域日本投資
促進会社
アレクセイ代表



ウラジオストク市ロシア極東発展省

■ FAR EASTERN ENERGY 社

同社は地域の主要な発電会社として展開している。電力の安定供給のため川崎重工業の技術導入、地域、また近接する極東連邦大学等に電力を供給している。タービン施設だけでなく、運用システムやリスクマネジメント等についても詳しく説明いただいた。

■ SEIJO FAR EAST 社

同社は日本企業と現地の日用品や食品輸入を手がける DIXI 社とで 2009 年に設立された合弁会社である。ロシア極東地域に小売りチェーン 20 店舗以上を展開し、卸売としてロシア 15 州 1,500 店舗に化粧品や日用品などを配送している。

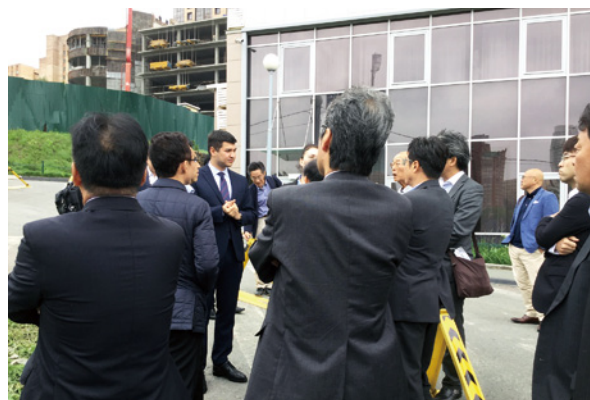
同社の大型物流倉庫とウラジオストク市の店舗を視察した。

■ 市内マンション建設現場

前日のブリーフィングに続いて、ロシア極東発展省のババエグ事業部長の案内で、市内のマンシ



ウラジオストク市 セイジョウ店舗視察



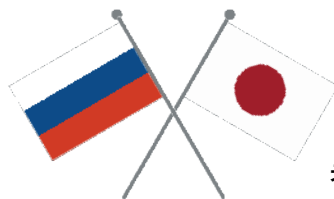
ウラジオストク市マンション建設現場

ン建設現場を 2 か所視察した。ウラジオストク市内での平均的なマンションの相場（70㎡で販売価格 1,400 万円前後）を聞くとともに日本との工法や使用材料の違いなど、ロシアとの不動産事業を実状に興味深く聞いた。

■ 参加者名簿

社名	役職	参加者名
ACS (株)	取締役	魚本 慎一朗
(株)エクストリーム不動産	代表取締役	宮本 将人
同	取締役	藤原 直人
榎本会計事務所	所長	榎本 幸雄
大村商事(株)	代表取締役	大村 相哲
(株)ケーエムエフ	代表取締役	小島 浩光
同	常務取締役	大森 敏光
(株)サンセイ	取締役	川口 哲
三徳アスリード(株)	代表取締役	林 宏幸
(株)サンワ製作所	代表取締役	村上 忠彦
同	チームリーダー	山口 公司
(株)シンコーハウス	代表取締役	宇津城 晃一
(株)染谷製作所	代表取締役	染谷 周
同	検査部リーダー	田端 嘉一郎
田邊ホールディングス(株)	代表取締役	田邊 光
(株)トキワ	所長	関口 浩之
日東精密工業(株)	代表取締役	近藤 敬太
(株)フィールドプロテクト	代表取締役	大澤 希
(株)ぶぎん地域経済研究所	取締役	松本 博之
同	副部長	藤坂 浩司

(社名 50 音順・敬称略)



考察

ロシア極東経済視察を終えて ハバロフスク・沿海地方の経済と 日本企業への期待

ぶぎん地域経済研究所取締役調査事業部長
松本 博之

最近の日本とロシアの経済や産業面での交流については、2016年5月のロシア南部のソチで開催された日露首脳会談において、安倍総理がプーチン大統領に対して8つの項目からなる協力プランを提示し、促進が図られ、この協力プランの各分野において日露間の様々なプロジェクトが進められている。

日露8項目の協力プラン

- ①医療・健康・寿命分野 ②住みやすい都市づくり
- ③日露中小企業の交流 ④エネルギー開発協力
- ⑤ロシア産業の多様化促進 ⑥極東での産業振興
- ⑦先端技術協力 ⑧人的交流の拡大

この中に、まさに今回の経済視察で訪れたハバロフスク市とウラジオストク市を中心とする「極東での産業振興」が含まれていることは、日本政府として日本企業の極東地域への経済投資や産業進出を後押しする意欲の現れとして興味深い。また「住みやすい都市づくり」、「日露中小企業の交流」、「ロシア産業の多様化促進」、「先端技術協力」や「人的交流の拡大」などの分野で現地の行政関係者や企業経営者の多くが、日本からの投資や技術提携、関連企業の進出に期待を寄せていることが、今回の視察を終えて分かった。

さりとて、ロシアの政府関係者や企業経営者のラブコールに応じるには、日本企業として、とりわけ中小企業の進出については、高いハードルが横たわっていることも今回の視察で判明したのも事実である。

ロシア政府による極東特区の整備

今回の視察で大変お世話になったロシア極東発展省は、2012年プーチン大統領が再び大統領に就いた時に設置された。極東地域の経済振興を重点施策とし、その中心となったのが、「優先的 socioeconomic 発展区域 (TOR)」と「ウラジオストク自由港 (自由港)」の二つの特区であると言われている。TORとは、他国にもある一般的な経済特区で、入居事業者は、法人税、資産税や土地税に加えて社会保険料 (雇用者負担) などの減免措置が受けられる。極東地域全体でも多くの特区が既に設けられている。ちなみに今回訪問した温室でキュウリやトマトなどの野菜を栽培している JGC エヴァーグリーン社は、TOR「ハバロフスク」内にある。しかしながら TOR によっては、電気や道路などのインフラ整備の状況が進んでいないところもあり、インフラ整備の進捗状況によっては、条件が大きく異なるということは、現時点での一つの課題と言えることができる。

「ウラジオストク自由港」の自由港とは、行政区単位で指定され、TORと同じような優遇措置を受けることができる。この中で、ことに日本企業にとってメリットとなるのが、ウェヴサイトから申請・発給される簡易ビザである。今回の視察においては、ハバロフスク市 (入国)、ウラジオストク市 (出国) と言うことで、この恩恵に浴することはできなかったが、自由港対象として、入国・滞在する場合、8日間を上限として、この簡易ビザが発給される。急な出張などにも対応し、ロシアへの渡航を容易にし、観光産業への波及効果拡大をも狙った措置と言える。

ロシア経済の課題

ロシア経済の安定をなす基盤となっているのが安定的な油価の存在である。また極東地域については石炭価格の重要なファクターとなる。ややもするとロシア産業は、「資源頼みの一本足打法」とも揶揄される。そのような状況の中で、今回の視察でブリーフィング等で得られた情報から、ハバロフスク市やウラジオストク市を中心とする極東ロシア地域の産



業発展のための新機軸を構築させるという観点で2～3点について考察する。

■物流（道路網のインフラ）の効率化・港湾整備

産業面から見ても、広大な土地を持っている物流の効率化は大きなチャレンジとなっている。逆に言うとロシア極東地域の産業育成の大きな生命線である。また道路だけでなく港湾整備も課題となっているとの話であった。加えて日本でも関心の高い北極海航路の開発の進展によっても極東地域の貿易や物流面での戦略的な立ち位置が大きく変わってくるものと期待される。

■注目される地場産業の育成

JGC 温室野菜工場の成功に代表されるように、最近では農業や水産業へ経済界の目が向いているという。地場産業を育てて地域経済の活性化に取り組む姿勢は、産業の一本足打法から脱却するための大きな柱として育てていきたいとの期待が大きい。

■観光産業の成長への期待

ビザ申請の簡素化に伴って日本人観光客も増加している。またウラジオストク市内では韓国人団体客のパワーに圧倒された。街なかにはロシア語にハングルが併記された看板やサインが目につく。観光産業・ツーリズムも今後の発展産業として期待され、実績が上がっているとも思われる。しかしながら、こちらについても“インフラ整備”を早急に行っていかなければならない。何せ、5つ星ホテルにおいても、フロントが簡単な英語すら理解できない現実を目の当たりにすると、そう感じざるを得ない。

ロシアへの期待

本文中にも書いたが、ロシアには日本のようにゴミを分別するという習慣がない。ようやく廃プラスチック製品のリサイクル再利用への取り組みが始まったばかりで、特に産廃関連の日本の事業者には直ぐにもアクションを起こしてもらいたいということは、ロシア政府関係者のみならず、民間からも聞くことができた。またハバロフスクでは、夏の気温が30℃以上、冬の気温が-30℃以上という気候の中で、道路に使っているアスファルトのひび割れや陥没が頻発多発し、社会インフラ整備の中心となる道

路整備に日本の技術が欲しいという話が聞かれた。またウラジオストク市では、都市機能の発展とともに“優良なオフィス不足”が発生している。この課題解決のため日本の不動産や建設業者からの投資や現地進出を期待する声も聞かれた。

現地の日本人の方からの話によると、極東ロシア人の親日の意識は非常に高いものがある。日露両国の交流の歴史を語る上で無視することが出来ないのが、日露戦争であり、日本海海戦である。ロシア・バルチック艦隊を打ち破った日本に対しての畏怖の念が、親日意識の底流となっているということであった。そしてウラジオストクやハバロフスク市内に多く走る日本車に代表されるように、現在は特に日本の技術に対する高い信頼性に現れているものである。

しかしながら、このようなロシア側の希望や期待に対して十分に答えられない日本側との温度差は明らかに存在することも分かった。極東地域は人口規模の小ささ、継続的な人口減少状態であることや、寒さ、広さから見て、日本企業のロシア投資にとってトッププライオリティには必ずしもなっていない。このためにも継続的な連邦政府の支援は不可欠で、それには税金の優遇策だけでなく、目に見えたインフラ整備の実績が日本企業の進出を加速させるためにも必要であるとの認識を得た。

ロシア極東における日本企業活躍の未来予測

ロシア極東におけるビジネスの未来予測において、中国の存在は抜きにできないものがあると思う。そこは、ロシア極東にとって“隣組”であり、そのマーケット規模である。

ロシア極東に進出した日本の中小企業が現地を拠点として中国マーケットへ打って出る。今後は日本とロシア、ロシアと中国に限らず、その先の韓国や東南アジアなどにも複数国との連携の可能性がビジネスの未来を膨らませていく姿を見てみたいものである。

そのためにも、ロシア政府には社会とビジネス分野のインフラ整備とイノベーションが、何より期待されることである。